

## YYJKからのお知らせ

「よこはま洋館付き住宅を考える会」では、洋館付き住宅をはじめ貴重な歴史的な建物を未来へ残すための活動を行っています。その活動の一環として、「洋館付き住宅の魅力がわかる本」を発行しております。また、学習会・見学会・展示会等のイベントも順次開催しておりますので、ご興味をお持ちの方はふるってご参加下さい。

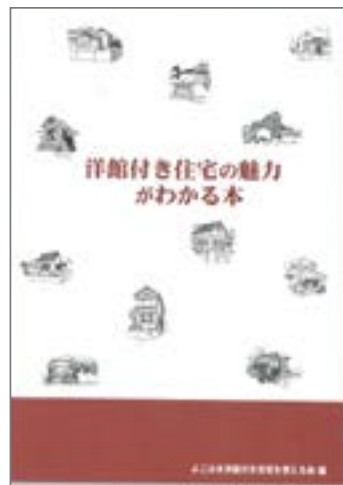
賛助会員を募集しています！！  
(年会費 1,000 円)

※ 賛助会員に入会された方には、会報「ハイカラくらしすまい通信」をお送りするほか、各種イベントのお知らせもお送りいたします。

■振込先：郵便振替口座 00200-4-68787 よこはま洋館付き住宅を考える会

## 販売書籍のお知らせ

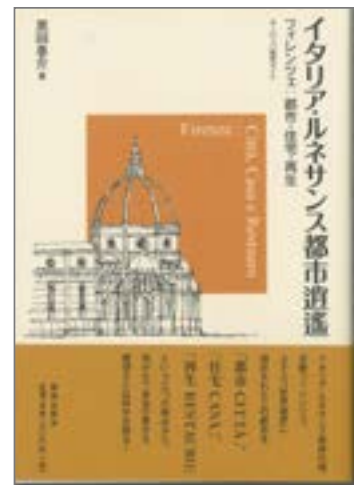
(※ 購入のお申し込みは E メールで [yyjk@usc.yokohama](mailto:yyjk@usc.yokohama) まで)



『洋館付き住宅の魅力がわかる本』

洋館付き住宅の魅力や大正・昭和の暮らしの文化をわかりやすいイラストで案内するハンドブック。

価格：800 円 (税込)  
送料：100 円  
発行者：  
よこはま洋館付き住宅を考える会



『イタリア・ルネサンス都市逍遙 (しょうよう)』

ルネサンス発祥の地、世界遺産の古都フィレンツェ。都市・住宅・再生の視点から、街が持つ本当の豊かさを紹介する。当会顧問、関東学院大学教授、黒田泰介氏渾身の書き下ろし。

価格：2,600 円 + 消費税  
送料：100 円  
発行者：鹿島出版会



『都市の記憶』  
横浜の主要歴史的建造物

近代建築、西洋館、社寺、古民家、土木遺産など近代都市横浜を象徴する歴史的建造物や文化財建造物を開設付き写真で紹介。ガイド地図を掲載。

価格：700 円 (税込)  
送料：100 円  
発行者：  
公益社団法人横浜歴史資産調査会

「よこはま洋館付き住宅を考える会」のご案内  
洋館付き住宅の魅力を調べ、楽しみ、住み続けるための支援活動を非営利で進めています。  
お問い合わせは下記の事務局まで。  
会費 (年額) / 正会員 5,000 円・賛助会員 1,000 円 (一口)・法人会員 10,000 円 (一口)

ハイカラくらしすまい通信 第 47 号 編集・発行：よこはま洋館付き住宅を考える会  
〒240-0014 横浜市保土ヶ谷区霞台 47-14 (担当：兼弘) / E-Mail: [yyjk@usc.yokohama](mailto:yyjk@usc.yokohama)  
TEL: 045-335-7164 / FAX: 045-335-7176 / <http://yyjk.jpn.com/>



よこはま洋館付き住宅を考える会会報

## ハイカラくらしすまい通信

第 47 号 2020 年 12 月 1 日発行

### ～YYJK設立 20 周年記念事業～ 「洋館付き住宅の再生展・座談会」報告

兼弘 彰

令和 2 年 1 月に会設立 20 周年を記念して「洋館付き住宅の再生展・座談会」を開催しました。当会で保存改修のお手伝いをさせていただいた洋館付き住宅の所有者の皆様にお集りいただいた座談会では、洋館付き住宅への思いや未来へつなぐ展望も語られ、想いをわかちあうことができました。とても興味深く有意義な内容の話が多く語られた座談会の内容をご報告したいと思います。

- 開催日  
再生展：令和 2 年 1 月 17 日 (金)～1 月 26 日 (日)  
座談会：令和 2 年 1 月 25 日 (土)
- 会場：根岸なつかし公園旧柳下邸
- パネラー：YYJK で保存改修支援を行った建物 (伊東邸・小宮邸・田畑邸・中澤邸・西崎邸) の所有者  
尚、パネラーの所有者の方々には事前に次のような質問を投げかけています。
- ①あなたにとってどんな建物か
  - ②保存再生に至った動機と経緯
  - ③保存再生して良かった点
  - ④これまで住んで所有してきて苦労した点
  - ⑤これからの希望・課題

### ■小宮邸 (小宮 武夫氏) 「出会いがもたらした建物の大舞台」



私は退職してからは慶応大学の先輩にあたる元総理の小泉純一郎氏の手伝いをしています。小泉純一郎が語ってくれたのですが、ある実業家が 90 歳を過ぎてから「これからは人生の大舞台だ。本当の大舞台が始まるから見ておけ」と言ったそうです。私はこの家で生まれ育ったのですが、近年は暮らしの拠点はほかに移っており、実は空き家であったこの建物を壊してアパートにしようと考えていた時期がありま

した。そんな時 YYJK の会報をお送りいただいたことがきっかけとなり皆さんに会い、お話を進めるうちに、この家を保存してゆくことを決意しました。その時 90 歳の実業家と同じように私もこの家も「これからが大舞台だ」という気持ちになりました。改修に当たってくれた大工の棟梁さんから「この建物はあと 100 年もつ」と言われています。この建物がこれからも活躍してくれることを期待しています。現在、外国の方の民泊や映画撮影などに利用させていただいて、日本の住宅の良さをみなさんに味わってもらっています。この建物がこれからの「100 年への大舞台」へ羽ばたけるよう、次の世代へも伝えていきたいと思

### ■伊東邸 横浜市認定歴史的建造物 (伊東 享氏) 「父が残してくれた財産を 100 年へ」



100 年ほど経た建物を今、ここで大きく手を入れ、「これからの 100 年へ」残していきたいという気持ちは小宮さんと同じです。次の世代へ伝えなければいけないと思っています。保存再生に至った動機は YYJK との出会いです。「どうしても、この建物は残さないといけな



い」と説得されました。父からこの家を建てた時の自慢話は聞かされていました。うちは戸塚区で代々医者的一家で、私は四代目です。この建物は関東大震災に遭った父が大正14年に建て直しました。今回改修工事を請け負ってくださった方は社寺建築を専門とされる高い技術をお持ちの方で、改修は私の希望通りにしていただきました。これから100年もたせることができるだろうと思っています。病院部分は築95年、住宅部分は築85年で、この家を建てた大工の息子が「おやじが造った大事な家だ」ということで頻りに手入れをしてくれたおかげで雨漏りなどはありませんでした。けれども、見えにくい部分の傷みが非常に進んでいたようです。屋根工事では、天然スレートの入手が困難で、洋館部分に既存の天然スレートの健全なものを集めて葺きなおし、和館はフランスから輸入したスレートで葺いたそうです。屋根は末広型に反っている形ですが、木に細かな筋を入れて自然に反らして仕上げていくという技術を見まして大変感心しました。東日本大震災では庭の灯籠が2つとも倒れましたが、建物はビクともせず、瓦の一つも落ちませんでした。関東大震災直後に建てたので耐震性にとっても配慮したようです。雨戸の開け閉めは今でも私の右手一本で端から端まで滑ります。やはり当時の大工の技術は高かったのだと思います。戸塚の大工が総出で手伝ってくれたそうです。関東大震災直後にこれほどの建物を建てた父を見直したと言いますか、父がそれだけの財産を「残してくれたことにも感謝」したいです。これからの希望や課題としては、建物の方がどんなにがんばっても、税金のことでどうしても継ぐことはできないとも思います。例えば行政が支援団体などと協力し保存支援していくような方法がなければ家を100年残してゆくのは、がんばっても難しいのではないかと感じます。そのようなことがこれからの課題です。

■田畑邸 国登録有形文化財(塚原 浩子氏)  
「家が水平に戻り生活が楽しく」

保存再生に至った動機としては、YYJKメンバーの方から家を保存する価値について熱心にお話しいただいたことに共感を覚え、お願いすることにしました。みなさんが信頼できる方々であったことも、大きかったと思います。

保存再生してよかった点は、「大きく傾いていた家が水平に戻り」、耐震性も高ま



り、安心して住むことができるようになったことです。収納なども今の生活にあったようになり、生活しやすく、設えを考えたりできて、「生活が楽しく」なりました。

これまで所有していて苦労した点は、改修前は、夏は涼しいのですが、冬の寒さが問題でした。しかし「改修によりそれが逆転」してしまいました。上げ屋をして、基礎がコンクリートべた基礎になったことで、夏場の地面からの冷気が無くなってしまい、夏、床下が涼しくなくなりました。想定外でしたが、夏の暑さはエアコンでしのいでいます。逆に冬は暖かくなりました。

これからの課題は、我が家を含めた洋館付き住宅の弱点である洋館と和館の間の雨仕舞の悪さが原因で再び家が傷むのではないかと心配です。保存改修をしたもう一つの理由は、新建材が身体に合わないの、自然素材でできた古い家に住み続けたいという点にありました。改修はとてもお金がかかりますが、「それでも直したい」と思いました。改修を終えて今はとても快適に住んでいます。

■中澤邸 横浜市認定歴史的建造物(中澤 良治氏)  
「住むしかない家を残してくれた祖父に感謝」

「あなたにとってどんな建物か」というと、私にとって「住むしかない家」なんです。

2004年に建築の雑誌でYYJKを知って、この建物を「調査してほしい」と飛び込みでお願いしたのです。調査では、耐震性などの改修の必要が指摘され、横浜市の都市デザイン室の協力を経て、2006年の4月1日から2007年3月31日までの住みながらの改修工事を始めました。当時この家に住んでいたのは、90歳を超えた私の母と、私と妻と、娘と、私の妹の5人でした。住んでいる人間は家のあっちこっちグルグル逃げ回って、一年間すごしたのです。工務店さんが入って、保存と耐震のための徹底的な改修を

宮下邸(磯子区) ~引き継ぎ再生する洋館付き住宅~

島田 真弓

戦前から海に近く、避暑地として多くの別荘が建てられていた磯子区森に洋館付き住宅がまた1軒、復活しようとしています。

今は工業地域として埋め立てが進む海との間には、国道や高層マンションが建ち並び、海への眺望はありませんが、背後の多摩丘陵の緑地やゆったりした敷地がかつての別荘地の面影を伝えています。眼前の国道沿いには同じような歴史を感じさせる風合いの洋館が点在しています。宮下邸は、太田町などを経て常磐町に拠点を置き、洋品の貿易商を営む商家の主が家督相続をする親族に対し、海辺の別荘にするなど好きなように建ててよいと言い、昭和8年に建てられたようです。国道16号線に面し車3台の車庫と門扉が並び、緩いアプローチを辿ると色ガラスの丸窓のある玄関、ルーバーのあるバルコニーが庇となる2階建て洋館が目にとまります。奥には平家瓦の和館が控えています。多くある洋館付き住宅の和と洋が並列に並ぶ佇まいとは、少し異なります。屋内も、玄関から直接廊下につながる洋館部分は応接間のある接客スペースと階段ホール、奥の和館部分は広縁を介して庭を囲む居住スペースと明確に分かれています。サービススペースの台所・女中部屋・洗面浴室の間仕切りや設備は改変を行い、現在の姿になったのは1968年です。廊下を取込み広くなった台所の厨房器具は元町荒井板金製作所の手になります。

コロナで在宅中の5月1日、宮下氏からYYJKのハンドブック「洋館付き住宅の魅力がわかる本」申込と、長らく空家になっていた洋館付き住宅を修繕し、住めるようにしたいとの連絡をいただきました。早速、建物見学と、長期間の空家による動物被害と傷み具合の調査、建築時の青焼き平面図とその後の増改築による変更場所などの調査、登録有形文化財への提案などを行いました。更に、新築時には3世代にわたる大家族の同居が当たり前前の暮らし方から、今後居住されるお孫さん世代では暮らし方の違いがあるので、修理を含む改修希望の有無、これまでの当会の改修事例の説明と見学のご案内などの情報提供を行いつつあります。

87歳の洋館付き住宅がこの度の改修工事で折り返し、更に80年生き延びることを期待し、改修計画を進めます。



↑外観全景



↑洋室のマントルピースとガスストーブ



↑御影石の門柱



↑洋館のフランス瓦



↑玄関色ガラスの丸窓



↑和館の座敷



## 美術品修復の報告

初めまして、新しくYYJKに入会いたしましたNPO法人美術保存修復センター横浜の内藤です。子どもは幅広い美術品（油彩画、版画、日本画、掛軸、仏像など）を修復しています。又、週末は絵画修復教室を開講し、初心者からでもゆっくりと修復を学べる場にもなっています。これから、過去に修復させていただいた様々な美術品修復を少しずつご紹介をさせていただきますと思います。

今回は、2017年、2018年に行った横浜市開港記念会館2階に飾られている、「開港前の横浜村」・「大正期の横浜港」和田英作の修復についてです。この2枚の絵は1917年の会館設立当時は、正面入口から2階へ続く階段ホールに飾られていました。ところが、わずか6年後の1923年の関東大震災により会館内部の殆どが焼け落ちてしまい、残念ながらこの2枚の絵も焼失してしまいました。その後、港の復興と共にこの会館も1927年に再建されました。同時に、この2枚の絵も同じテーマで再度描かれました。後に絵を守る為、ガラスケースが取り付けられます（ケース内から見つかった新聞片から昭和56年と推測）が、密閉構造になっている為、絵がどのような状況かが、長年の間不明のままです。作業はまず、足場を組み、このガラスケースを外すことから始まりました。念願だったこの絵の調査を開始したところ、キャンバスに描かれた油彩画が壁に直接貼られている事がわかりました。なんと、壁画だったのです!! この技法はフランスではよく見られ、和田英作がフランスで学んできた技法で描かれた事がわかります。さらに驚いたことには、横浜市章が掘られた豪華な額が施され、直接壁にはめ込まれていました。1927年の復旧時の館内写真を見ると、まだ絵は貼られておらず、額だけが壁に製作されています（当時、和田英作は大変



↑大正期の横浜港

NPO 法人美術保存修復センター横浜 内藤 朝子

忙しく、実は開館に絵の制作が間に合わず、のエピソードも笑)。この額は復旧計画の時点から壁にはめ込んだ形的设计だと、推測できます。又、絵が描かれてから90年の時が流れていましたが、絵具の剥離などはなく、和田英作のフランス仕込みの技術の高さが伺えました。又、壁に直接貼ると言う技法の選択により裏面からの湿度や乾燥、埃の蓄積などの影響から免れ、とても良い状態が維持できていると考えられます。実際の修復作業は、埃汚れ除去/黄変してしまったワニスの掛け替え/傷による欠損部の補彩を中心に、来館している会館利用者の皆さんに見ていただけるよう公開型の修復作業を行いました。和田英作は、「鹿児島近代第三の巨匠」と呼ばれ、迎賓館赤坂離宮喫煙室（現東の間）のエジプト風の壁画（bs-asahi 百年名家で視聴可）も手がけています。和田英作の多くの作品は震災や戦争で失われ、この2枚の壁画は大変貴重な作品です。又、横浜市開港記念会館は現役の市民ホールとして常に開放されている事から、美術館へ行かなくともいつでも鑑賞を楽しむ事ができます。お散歩のお休憩ついでに是非2階へ上がり、見に行ってください。歴史的建造物内の美術品は、建物と共に歴史を歩んできました。今後もこのような美術品が守られることを願っております。



↑開港前の横浜村



↑館内での修復風景 2017年



行いました。改修工事の過程は非常に大変でした。家中をあちこち避難して歩くわけですから。でも今思えば、楽しい思い出になっています。余談ですが、私の妹がピアニストで、工事の間も毎日一生懸命ピアノを弾いて練習しているわけですね。当時、『戦場のピアニスト』という映画がヒットしていて、我が家は『戦場のピアニスト』ならぬ、『工事現場のピアニスト』という感じで日々の工事はピアノの伴奏付きで進んでいったのです。妹もよくあの修羅場のなかで練習してコンサートをしたものだと思いますが、よくがんばっていました。工事の方も本当に大変だったと思います。我々も本当に大変でしたが、そういう思い出は、今思い出しても、楽しい思い出です。

保存再生してよかった点というのは、これは、本当によかったのです。この建物は日吉の台地で地盤がよくて、水害の恐れもほとんどないところに建っています。夏の日には風通しよく、冬の日にはベランダとサンルームの暖かさに恵まれています。この家を「残してくれた祖父に感謝」しつつ暮らしています。この家を建てた祖父は1929年昭和4年から1933年昭和8年まで日本郵船の客船『浅間丸』の機関長を努めておりました。そのような船乗りなので、海外の建物を見てきたと思います。1933年に日本

郵船を退社して、その直後にこの家の建築にかかったようです。祖父としては、色々な思いがあって建てた家です。建物の中はマントルピースなど船のなかと似ている点がいくつもみられます。日本郵船の歴史博物館で客船『浅間丸』の展示がありました。1929年に浸水して90年となりました。浅間丸の内装をみると、我が家と似ているところがあるのです。よほど祖父は浅間丸に思い入れが深かったのだと思います。1949年に祖父は亡くなりました。浅間丸は1944年に南シナ海で撃沈され、その思いを抱いて死んでいったのだと思います。しかし、昭和初期1933年に建った家なので、その時代と現代の生活様式の不マッチは埋めがたいです。これはどうしようもないです。今は家族三人で暮らしています。これからの課題は、この家を継ぐものがいないことです。私としては、自分の代は維持します。でもその後は無理というのが現状です。残してゆくためには外部の機関の介入が必要になると思っています。私も色々相談してはいるのですが、思うように進んでいません。できるかぎりがんばっていきたくと思っています。

西崎邸 国登録有形文化財(申請中)(西崎 進也氏)  
「掘り出し物のオーラがある家を買いました」

「あなたにとってどのような建物ですか」とい



うと、「掘り出し物」だと思って、一昨年買いました。でも素人が築80年の家を買うなんて、ほぼ博打です。家族には反対されたのですが。家がほしくて、住宅展示場とかを見に行ったり、普通の新築の戸建ても見に行きました。家族はやはり「新しい家がいい」と。新しい家は住みやすいのです、快適で。でも家として、物として、所有するものとして魅力がない、とってしまいました。色々探しているうちに「古い家がいいな」と思うようになって、千葉の茅葺の古民家も見に行ったりしました。古い家は空気が違



います。自然な感じがして。買うのであれば古民家にしようと思いました。そのなかでも戦前の古民家がいいなと思って。素人考えですが、やっぱり戦前の建物は時間も手間もかけて建てていると思うので、そういうものを探しました。そのなかで普通の不動産屋さんから「洋館付き住宅」というものを偶然紹介されて、『となりのトトロ』では見たことがあったのですが、それが目の前に現れて「すごい」というか「おもしろい」というか「不思議」というか、「どういふ人がこんな家を建てたのかな」と混乱してきて、「なんなんだ、この家は？」と。でも自宅に帰ってみて、「もう一度行きたいな」と思いました。結局、3回くらい現地に行って、3回目で「この家を買おう」と決心して家族を説得しました。この家がなぜ良いかと言うと、やっぱり、感覚的に良いのです。専門的なことわかりませんが、「家のオーラ」というのでしょうか、家の中に入らなくても見た瞬間の空気感を感じてこの家は「間違いないな」と思いました。家探しはたくさんしたのですが、不動産屋さんにも建物を紹介されても、見た瞬間に断った家が何件かありました。やっぱり第一印象ですね。入らなくても見ただけでいい家は「**すごくオーラがある**」ので。7～8年探した結論でした。家族からは「こんな古い家に住めるの？」と言われていました。冬の寒さが心配ですが、しかし、そういうことは大した問題ではないと思っています。

## 【フリートーク】 「生きた使われ方として持続性がある方法で継ぐことが課題」

(小宮)  
やはり冬は寒いですし、雨戸は毎朝夕に20枚ほど開け閉めしますので大変です。でも色々なアイデアを出して克服できればこのような建物の価値が高まって、可能性があるかもしれません。古き良きものに対する感度が最近の若い方は高くなってきていると思いますので。うちの場合は、外国人の方が月に1～2度来ています。「外国の方たちと接するのが楽しみ」という目的も動機付けの一つになるかもしれません。行政に面倒をみてもらうというよりは、我々も含めて、こういう団体の方々と知恵を出して、工夫してやっていけば、価値も高まっていくのではないのでしょうか。ぜひ情報交換の場をこれからもつくっていただけたらと思います。

(菊池 ※ Y Y J K 正会員)

若い方も価値ある建物や文化をたくさん勉強

されていますので、良いものを継ぐ志が、さらに広がるのではと思います。外国の方はこのような日本の建物を「良い」と感じています。欧米の建物は躯体が頑丈ですので、古い建物は内部を自由に改装して、建物が使われ続けています。日本の建物は古くなってしまふと解体して、すぐに新しい建物が建ってしまいます。国際化のなかで「日本として良いもの」を私達にも伝えていきたいと思うのです。そこで大事なことが、知識と技術を伝承されていくことです。今後、技術の継承を含めて、残すために必要なことを多様に考えていかないといけないと思っています。

(押尾 ※ 洋館付き住宅の所有者)

大工と左官、板金の担い手も無くなりつつあると思います。私のうちも雨樋が壊れて修理の相談を何件かしましたが、「難しい」と断られてしまいました。どうやって技術を残していくか。技術の伝承が必要であると思います。

(西崎)

私も修理は必要最小限で、手を加えたくないと思っていました。やり方が難しいですね。車でも時計でも、今は何でも新しくしてしまいます。手っ取り早いですし。そうではなくて、だめなところだけ替える。もともと素材は良いものなので、もったいない。だめなところだけ替える方法が最良と思っています。

(中澤)

西崎さんのお話を伺って非常に心強く思いました。西崎さんのような関心の高い方がおられるということは心強いです。もしかすると西崎さんのような方がもっといるかもしれない、と可能性を感じました。「オーラを感じる」という若い方を頼りにしたいです。

(小宮)

西崎さんがおっしゃる「オーラがある家で暮らしたい」ということに、このような建物が脚光を浴びていくのではと期待しています。今、若い人たちは古き良きものへ価値が深まっていますし、このような建物がリノベーションされて利用されていくことを願っています。

(渡辺 ※ 横浜市都市デザイン室・歴史的建造物担当)

所有者の方や皆様のお話を聞くことができまして、仕事の上でも、私自身の経験としても、とても勉強になりました。私が都市デザイン室の歴史的建造物担当の仕事に携わる中で、やはり多くの歴史的建造物は相続を乗り越えることが難しいと実感しています。昔は行政で買い取って公園に整備して保存活用するということがありましたが、現在は行政の力だけでは立ち行か

ず、みなさんと力を出し合わなければならない状況です。金融の仕組や不動産のマーケットを上手く活用して、新たな開拓やネットワークをつくっていくということを本当にやっていかなければいけないと改めて思いました。多くの歴史的建造物が解決の糸口が見えないまま、相続をむかえてしまうのが現実です。所有者の皆様の「ぜひ残したい」という思いは、私達にとって励みになります。でも現実はどうしても最後にお金の問題になってしまいます。金銭的なことを踏まえて、この建物や土地をどのようにできるか、解決が見えにくいところです。技術の継承のためにも、より多くの物件を扱うことが望ましいですし、市民の皆様と行政と一緒に、前向きに議論を進め、新しい一歩を踏み出していきたいと思っています。

(小宮)

うちは民泊に登録していますが、横浜市は古い良質な住宅を民泊などで活用するような計画はないのですか。

(渡辺)

今の横浜市の制度は都市計画上の土地利用の住宅地で民泊ができる地域とできない地域に分かれています。でも海外の方などの需要の可能性があると思いますので、これまでのやり方を工夫できると一つの解決の手口になると思います。大きく変えるのは難しいのですが、新しい何かを少しづつ広げてみなければいけないかなとも感じています。皆さんがおっしゃるように、マーケットの開拓も一つの手段なのではないでしょうか。

(小宮)

そのような手段の一つが、今日の会でもあると思います。皆で集まって、色々工夫しながら助け合って、動き始めることが一番いいと思うのです。例えば海外からの方々から「横浜の良質な日本邸宅で滞在できた。横浜市は、良い街だ」と高い評価が得られれば、建物の価値が広がり、関わる人の評価も高くなると思うのです。つまり、技術を持つ大工さんの需要や評価も高まり、成り手も広がるのではと思うのです。

(中澤)

今日のお話を伺って、私のうちのような家を好んでくれる方を Y Y J K などの皆様に、探していただきたいと思いました。我々にはそのようなつながりがなく、 Y Y J K や、都市デザイン室などを頼らなければ難しいと思っています。市場価格での取引ではなく、この家を生かして住んでくれるような人へお譲りしたいと思っています。今日ご参加の皆様を頼りに、つ

ながりを広げていきたい、と願う思いです。このような仲介は重要な仕事でもあると思います。次の世代に受け渡していくには、どうしていけばいいのか。自分の身近な親族に継がせることだけが方法ではないと思います。需要をつないでいただけたら、私はそれに対して欲をもたず、建物と志を引き渡していく。それは、信じていただいて結構だと思います。技術の伝承も、みなさんのような方々に頼らなければ、自分で工務店や大工さんを探すのも現実的ではありません。みなさんのように一生懸命考えてくださる方がおられる、ということはこの会で知り得ることができました。浜っ子市民のプライドとして、このような若い方々に期待を込めて、我々も建物や日々の暮らしを守り、つないでいきたいと思っています。

(島田 ※ Y Y J K 代表) 終わりの言葉

20年前、会を立ち上げ400棟ほど見つけた洋館付き住宅も、今残るものは200棟程度になってしまいました。洋館付き住宅は、夏には木の間を抜ける風が涼しく、冬は木漏れ日の陽だまりがあたたかく、その地域をいかした日本の伝統を踏まえた「つくり」の建物です。私たちの会の仲間には、志を理解して下さる大工さん、建具屋さんなどの職人さんもいます。そのようなつながりで建物の修理ができて、本日お越しいただいた皆様のお宅のようによみがえった洋館付き住宅もあります。我々は「使い続けることができる」という希望を皆様にもっていただこうと、想いを会報へのせて皆様のもとへお送りしています。今日の会では、所有者の方からも、若い方からも、がんばろうという心に触れることができ、嬉しくなりました。これからもたくさんの方々と仲間になって Y Y J K をやっていきたいと思っています。本日は誠にありがとうございました。



↑ 座談会の様子 (旧柳下邸居間にて)